



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

光るどろだんご大展覧会  
—10年をふりかえる—

vol. **40** | 季刊 2016 夏





10年を  
ふりかえる

2006年10月、「土・どろんこ館」のオープンと同時に始まった「土」をテーマにした体験教室「光るどろだんご」。今年5月には体験者が20万人を突破。その人気は衰えることがない。きれいな土の球を作り、色をつけて磨く——。そのシンプルなものづくりは、約90分の制作時間のなかで、土の手触り、色の変化、集中、楽しさ、達成感といった豊かな気持ちをもたらしてくれる。「何度作っても飽きない!」。そんな声に応えるために、色や技法を工夫してきたスタッフ、大会で生まれた独創的な作品の数々。10年にわたる、光るどろだんごのあゆみをふりかえります。

大会最優秀賞 2007光るどろだんご大会 田中尚輝さん 愛知県/光るどろだんご全国大会2008 佐竹真依さん 愛知県「海中の神秘」/2009 松本健生さん 石川県「きょうりゅうのたまごの化石」/2010 入江 央さん 埼玉県「嵐の夜」/2011 新井 和さん 名古屋「雪だるま」/2012 柴田美優さん 埼玉県「はな」/2013 齊藤有純さん 千葉県「富士山の初雪」/2014 三好夢歌さん 愛媛県「夜空に輝く満天の星」/2015 中嶋陽子さん 愛知県「雲をぬけ星に願いを」

\*歴代の最優秀作品は「土・どろんこ館」に永久保存されている。

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

## 01 [特集] 光るどろだんご大展覧会 —10年をふりかえる—

### LIVE REPORT

**07** 開催報告  
 ゴールデンウィーク特別イベント  
 みんなでシャボン玉を飛ばそう  
 「光るどろだんご」体験者20万人達成!  
 ムジカセラミカ ミュージカルの世界

### LIVE SCHEDULE

**08** 好評開催中  
 企画展 タイルの幾何学—秩序と無限の模様  
 企画展 炎を操る 刀・やきもの・ガラス—1050度、美の誕生

**09** これからの催し  
 INAXライブミュージアム フォトコンテスト2016  
 夏休み特別企画  
 どろの遊園地2016～子どもは遊びの天才だ～  
 光るどろだんご大会2016 inセントレア  
 INAXライブミュージアム ナイトミステリーツアー  
 夜の「世界のタイル博物館」を探検しよう!

## CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol. 40 | 季刊 夏  
2016

表紙写真  
 陶楽工房で作った作品を受取りに来た仲良しの兄弟姉妹。今日は「世界のタイル博物館」をゆっくり見学して、どろんこ広場でひと遊び。今度は光るどろだんごを作りに来てくださいね。  
 (2016.5.30)  
 撮影:加藤弘一



常滑から※  
39

## NEO招き猫・登場

常滑に誕生したショッピングモールは、サミットで各国首脳も降り立った中部国際空港に程近く、海外からの旅客も足を運ぶ話題の大型商業施設だ。生産地にちなみ、そこに「招き猫」が配されているが、中でも一風変わった猫たちに出会える一角がある。駐車場から店舗入り口への動線に沿って、奇抜な「招き猫」たちが独特の表情でお客を誘い、恰好の撮影スポットにもなっている。地元作家や愛知の芸術大学生さんたちが、「日本らしさ」をテーマにデザイン・制作した、全く新しい容姿の「招き猫」。名付けて(勝手に)「NEO招き猫」。

お気に入りには、日本の先進技術と伝統の融合を表現した「猫型ロボットMC-3」。さらさら光るビーズでおもいっきりデコレーションした「デコ」には、「デコる」という現代日本の文化を象徴している。なんだか金運を招いてくれそうで、気持ちが高揚しないでもない。「招き猫」といえばやきものと決まっている。それらも確かにやきものだけれど、その枠をどこかでみ出してしまおうという向きがある。

デザインも、素材も、ポータレスの時代。こんな若者の瑞々しい感性が、未来の陶都・常滑を牽引していくのかも知れない、と、ふと考へた。

尾之内明美(広報担当)

\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

# オリジナルの 光るどろだんご、誕生

ライブミュージアムオリジナルの光るどろだんご。その誕生のきっかけは、この10年光るどろだんご大会で審査委員長を務める三木きよ子さんと、今は亡き「左官の神様」榎本新吉さんとの出会いだった。榎本さんは、左官の材料と技を使ったピカピカに光るどろだんごを作り、その輝きは20年持つと言われていた。そして三木さんは、榎本流の光るどろだんごを全国の教室で教えていた。その教室を訪ねたのが磯村司陶楽工房長(当時)。新しくできる「土・どろんこ館」の担当でもあった。

教室の後、三木さんのはからいて榎本さんの工房に。「教えてやるから作っていきなよ。時間はあるんだろと言われ、一通りの工程を見せてもらった後、最後の仕上げを体験させてもらった。今まで見たことがないレベルの高いどろだんごに、心が震えるほど感動した」。左官の榎本さんは、左官の材料で作る。それを真似してはいけない。よみがえったのは子どもの頃の記憶。祖父がろくろを挽いて、半乾きのときに祖母が磨いていた姿。「粘土って光ったよな」。名古屋に着くと、すぐ100円ショップに行行って使えそうな道具を買って、陶楽工房で信楽の粘土を丸めて作ってみたい。「これはいけると思った」。こうして榎本流のどろだんごは、やきものの土を使って作るライブミュージアム流となり、光るどろだんご体験教室は始まった。

## 競い合えば、もっと楽しくなる

2007年8月、初めての「光るどろだんご大会」が開催された。愛知、静岡、岐阜、富山などから107組が参加。記念すべき初の最優秀賞は小学校1年生。

「一生懸命作ったことが伝わってくる、パワーのあるどろだんご」と評価された。

これ以降、愛知県を中心とする知多地区大会と、その上位3名と、全国主要都市のリーダークラスの支社・営業所で開催されるどろだんご教室の代表者が出場する全国大会が行われ、腕に覚えのある人たちが「光るどろだんごの聖地」である「土・どろんこ館」に集結することとなった。「ものづくりって、ただ作って自己満足するだけじゃないって気がついたんです」と言う磯村。うれしいのは、「すごいね」「きれいだね」と人から評価されること。競い合う緊張感、選ばれる誇らしさ、達成感と自信。いつもの体験教室とはちがう雰囲気味わう場が「大会」だった。

10年にわたる大会は、数々の物語を生み出した。2009年から3年連続で地区大会を制覇。審査員を唸らせた田中あやさん。その傍らにいた娘さんは、ここ数年地区大会の上位に名を連ね母娘は競い合う仲に。球の表面にあえて引つ掻き模様をつけた意外性が高く評価され、2010年最優秀賞に輝いた入江央さん。実は間違えてつけてしまった傷を「生かしたら」と狭土秀平審査委員長からアドバイスされ、逆転の発想で勝ちとった。地区大会を「家族といえどもライブバル」と競い合った結果、お母さんが見事に優勝、笑顔に包まれた中嶋陽子さん一家。内向的な女の子が表彰状を持って、元気に登校したことを知らせてくれた手紙。「どろだんごは、娘の心まで光らせてくれました」と添えられた言葉。「大会をやっていると、もの」を作っているのではなく、「こと」を作っているんだなとつくづく思う」と磯村はふりかえる。

大会は、参加者だけでなくサポーターも熱くする。真剣に取り組み姿を見ると、みんなを応援したくなるのだ。「がんばれ、がんばれ」「光れ、光れ!」。毎年同じ光景だけれど、生まれる物語に同じものは一つもない。そして毎年感動する。それが大会だ。



緊張感、集中、サポーターの熱い応援。競い合うからドラマが生まれる。

「土・どろんこ館」で出会う「光るどろだんご」。土の手触り、光る不思議を体験して。



賞の決定は参加者投票と審査員票で。10年変わらない審査スタイル。



- 1 競技終了後、それぞれの出来栄を真剣に見る参加者。
- 2 地区大会はセントレアで開催。歴代のセントレア賞が空港内に展示されている。
- 3 司会者のインタビューを受ける参加者(2014)
- 4 第1回大会の最優秀賞を受賞した田中尚輝さん(2007)
- 5 応援するサポーター
- 6 地区大会を3年連続制覇した田中あやさんと娘さん

どろだんごはものづくりの楽しさを教えてくれます。  
三木きよ子さん(どろだんご・土絵作家)

第1回の大会で選ばれた最優秀賞は、小学1年生の男の子でした。荒削りながら心に響く輝きを放ち、まさに原点の光るどろだんごとして記憶に残っています。参加者の技量は年々上がり、使い慣れた道具や仕上がり目標の絵を持参するなど、制作に対する意気込みが作品に表れるようになってきました。回を重ねるごとに審査も難しくなってきました。表現力豊かなどろだんごと出会う大会。次はどんなどろだんごに出会えるか、毎年楽しみにしています。



年々、工夫した道具を持ち込む参加者。

- 1 削り  
やきもの用の粘土を丸めた「タネ」を道具を使って真球になるまで削り、表面を滑らかに。
- 2 色付け  
化粧どろで色付け。手のひら全体を使ったり、指先で色を乗せたり。
- 3 磨き  
瓶の口でだんご全体を磨く。だんごがきつとりしてきたら手のひらでころころ。これを繰り返してピカピカに。

光るどろだんご、作り方は簡単です!

# 「また作りたい!」と 思わせる新作光るどろだんご

光るどろだんごの人気を持続させてきた要素の一つが、「季節のテーマの光るどろだんご」。年に4回、期間限定のどろだんごは、「土・どろんこ館」のスタッフ全員で取り組む重要課題。新しい色や技法を取り入れて、繰り返し足を運んでもらうことが目的だ。スタッフは日々の体験教室を担当しながら、アイデアを考え、話し合い、試作を繰り返す。「冬の星空」「春がすみ」「秋の風」。新作どろだんごのネーミングも「作りたい」と思わせる大切なポイントだ。「教室で、制作の合間にお客さんに聞いてみるんです。こんな色どうかな、こんな楽しいかなって」と言うのは、「土・どろんこ館」スタッフの小嶋昭恵講師。流行色のチェックなど日頃からリサーチは欠かせない。

「化粧どろ」と言われる色は、薄い色の粘土と顔料を混ぜて作る。顔料が少ないと粘土の色に負けてくずんでしまうし、顔料が強いと土らしさがなくなってしまう。新色は、そのバランスを何度も試作し見極めて作られる。めざすのは自然素材である土の良さがあって、かつ、今までにない色。こうして作られたトスカブルーやネイビーブルーは、「小さな地球をつくろう」で、地球の青さを表現する幅を大きく広げ、マロンクリームは「おいしそ」と評判を呼んだ。

そして、そこに加わるのが新しい手法。だんごを彩る装飾の技として、象嵌や流しかけといった陶芸の手法からヒントをもらったり、糸やゴム板など身近なものを使ってみたり。大会参加者が持参するユニークな道具も大いにヒントになると言う。「いつもと違うだんごを作りたい」。リピーターの光るどろだんごへの思いに伝えるべく、スタッフはみんな、アンテナを張り巡らせて新しい光るどろだんごのアイデアを探している。

## 光るどろだんごに込める思い

光るどろだんごの体験者は、当初から右肩上がりが増えて、2010年からは15000〜16000人へ推移し、2015年は過去最高、17000人を超えた。親子連れ、カップル、シニア世代…。10年前に比べて体験者の年齢層は広がり、ファミリー層だけでなく多様な人たちが楽しむようになった。そうして見ず知らずの者同士が同じテーブルについて、どろだんごを作る。いつのまにか会話が弾んで最後に出来栄を見せ合う。「一人で作るんだけど、ものを作ることでつながりが生まれるんですよ。それが魅力かな」と言う磯村。

教室に立つ講師たちは、そんな人たちの呼吸を感じ取る。「集中してる」「ちょっと疲れてきたかな」。励ましたり、リラックスさせたり。もう終わりだと気が緩んできた頃には、「終わりじゃないですよ。宿題があります」と驚かせ、ここで作った光るどろだんごを家でも2週間磨いてほしいと伝える。「これを言うと笑いが起こり、みなさん、なんか晴れやかな表情になるんですよ」と小嶋講師。今自分が作っただんごが、手をかければもっとピカピカに輝く。そのうれしさが表情に表れるのかもしれない。

「お気に入りの喫茶店でコーヒーを飲んで一息つくように、「土・どろんこ館」で光るどろだんごを作って、気持ちのいい時間を過ごしてもらいたい。どろだんごを作ったらフレッシュして気持ちよく家に帰れる。そんなふうには、この10年、ものを作って終わりにしないということがよくわかってきました」と磯村。

ものを作る楽しさ、自分の手で生み出したものの愛おしさ、いつもとは違うその時間の大切さを、これからも光るどろだんごづくりは教えてくれる。



1



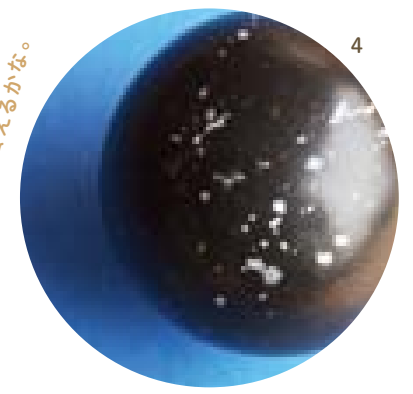
2



3



5

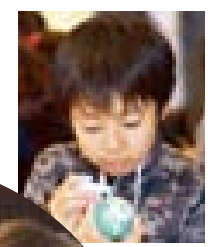
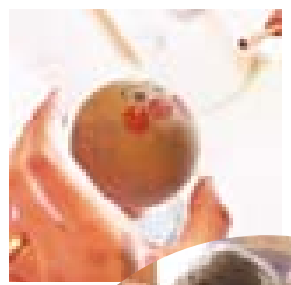


4

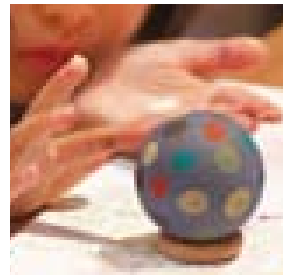
### 季節のテーマの 光るどろだんご [主なもの]

- 1 あったかニット模様 (2013 冬)  
ゴム製の滑り止めにだんごを押したり、転がしたりして作った編目模様。
- 2 マロンクリーム (2014 秋)  
数少ない暖色系のどろだんご。「本当の栗のような色」と評判を呼んだ。
- 3 炎につつまれた土 (2013 秋)  
歯ブラシを使って火の粉を表現。
- 4 冬の星空 (2010 冬)  
指先に色をつけて、はじいて表現する星。
- 5 小さな地球をつくろう (2010 夏)  
毎年夏に登場する人気のテーマ。3色の青を使って「青い地球」を豊かに表現。

地球、星空、季節の香り…次はどんな光るどろだんごに出会えるかな。



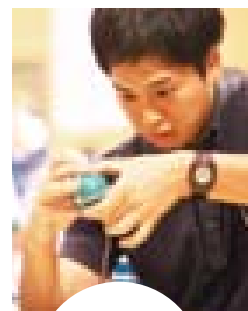
小さな手で、  
がんばって削ろう。



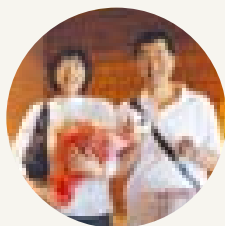
ほら、みんないい顔。ものを作るって、いくつになっても楽しいね!



作り方を説明する  
スタッフ



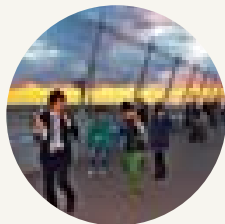
道具を使って自分  
だけのどろだんご  
を作る!



体験者3万人突破(2009)



セントレアのマスコットキャラクター「旅人フー」登場。(2009)



全国大会の前夜祭でセントレアを見学。楽しい催しで交流を深める。(2010)



上海万博(2010)



シンガポールで光るどろだんごのワークショップ開催(2016)

2006年	7月28日	「土・どろんこ館」の建設が進む中、土絵作家・三木きよ子先生の「光るどろだんご」講座を視察。オリジナルの「光るどろだんご」の研究、試作に弾みがつく。
	10月1日	INAXライブミュージアム、グランドオープン。 「土・どろんこ館」オープン。
	10月7日	第1回光るどろだんご教室開催 参加：22名 320gのタネ（粘土を丸めた球）はお子さんには重そうだった。その後、徐々に小さくして現在は250g。
	10月14日	第2回光るどろだんご教室開催 参加：日本左官組合連合会青年部40名 プロのみなさんを前に、スタッフ緊張！
2007年	3月18日	土曜開催だった教室の定員がすぐに埋まってしまうため日曜日も開催。後に平日も開催するようになった。
	7月	体験者が3000人を超える。
	8月3～5日	第1回光るどろだんご大会 審査委員長：三木きよ子さん 出場：県内外から107組（保護者同伴の部・個人の部） 最優秀賞は小学1年生
2008年	春	光るどろだんご「季節のテーマ」始まる。春：さくら色 春休みの期間に、小さな子にも作りやすい「ちびだんご」開催
	7月20日	「知多地区大会」 出場：51名
	8月10日	「第1回全国大会」 出場：31名 中京テレビの取材クルーが入る。
2009年	6月10日	体験者3万人突破
	8月2日	「光るどろだんご大会2009」 出場：38名
	11月29日	「光るどろだんご全国大会2009」（第2回）を中部国際空港セントレアで開催。 出場：14都道府県の地区予選で選出された代表26名。審査委員長：狭土秀平さん この年から全日本空輸（株）と中部国際空港（株）が全国大会共催に。
2010年	6月12日	INAX 知多事業所の植樹祭で、初の出前教室。200人にちびだんごを作ってもらおう。
	夏	COP10に関連して「地球と生命を考える体験教室」開催。「小さな地球をつくろう」を夏のテーマにする。宇宙飛行士・秋山豊寛さんの特別講演会も実施。
	8月3～8日	上海国際博覧会「日本産業館」のアトラクションとして初の海外ワークショップ「光るどろだんご大会」を開催。参加：380名
	8月28日	「光るどろだんご大会2010」 出場：32名
11月28日	「光るどろだんご全国大会2010」（第3回） 出場：28都道府県、約700名から選出された36名。前日の27日に、プレイベントとして中部国際空港セントレアで「光るどろんこ教室」を開催。80名が参加。	
2011年	9月11日	「光るどろだんご大会2011」 出場：36名
	11月27日	「光るどろだんご全国大会2011」（第4回） 出場：21都道府県、約735名から選出された27名と、土・どろんこ館の代表3名。 前日の26日に、プレイベントとして中部国際空港セントレアで「光るちびだんご教室」を開催。代表選手は、セントレア見学ツアーやスカイデッキのイルミネーション点灯式、前夜祭などに参加（以後、毎回実施）。
2012年	7月27日	5年9カ月で体験者10万人達成
	9月9日	「光るどろだんご大会2012」 出場：31名
	11月24日	「光るどろだんご全国大会2012」（第5回） 出場：19都道府県、540名から選出された27名
2013年	3月23日	日本科学未来館1階シンボルゾーンの大きな地球型スクリーンの下で、小さな地球を作るワークショップを開催。
	9月15日	「光るどろだんご大会2013」 出場：23名
	9月21日	香川県高松市の小学校の依頼で、出張「どろだんご教室」を開催。 参加：180名の親子
	11月24日	「光るどろだんご全国大会2013」（第6回）開催。出場：19都道府県の代表31名
2014年	9月7日	「光るどろだんご大会2014 in セントレア」 出場：28名
	11月23日	「光るどろだんご全国大会2014」（第7回） 出場：37都道府県の代表45名
2015年	9月13日	「光るどろだんご大会2015 in セントレア」 出場：28名
	11月29日	「光るどろだんご全国大会2015」（第8回） 出場：23都道府県の代表28名 U-streamによる中継。
2016年	4月7・8日	日本とシンガポールの外交樹立50周年記念イベント「Super Japan-Japanese Festival of Art」に協賛し、シンガポールのEsplanade-Theatres on the Bayで光るどろだんごのワークショップを開催。参加：52名の子どもたち
	5月23日	9年7カ月で体験者20万人達成